

泰西女訓

本田増次郎編

女子教育に關する新聞雜誌類を讀む者は編者の堅苦しからざる一種灑落の文を以て、而して時に滑稽をも雜へて、教訓を教訓臭からず説くに妙を得たるを知るならん。

本書は其序に曰へるが如く英國ハーデー氏著の

『婦人の五才』中より『十章を抜き譯述敷衍して前年』をんな紙上に連載せしが、今又新に五章を加へて此書を作り敢て世の婦人少女と女子教育者とに薦めんとせられたるものなり。書中掲ぐる所は(一)笑面の方(二)秩序の中心(三)健康の保管者(四)少し話して多く言へ(五)婦人の勇氣(六)卒業より結婚まで(七)婚前の教訓(八)夫定め(九)内助の功(一〇)妻の威化(一一)

獨身にても幸福なる法(一)婦人の書簡(二)三女子の學問(一)少女の宗教(一)五女子の娛樂にして、その内容は婦人間に行はる、諸弊を諷諭して矯正を促し、或は指導して向ふ所を知らしむるが如きものにして所謂良妻賢母たらんとする者と獨立生活を營まんとする者とを問はず、若きと老いたるとに論なく貧さと富めるとに拘らず、順境に在るも逆境に立つも婦人をして力を増さしめ、自信を強からしめ、活動を促がさしむるに足るが故に余も編者と共に之を『世の婦人少女と女子教育家とに薦めんとす』る者なり。世には薦められて大に迷惑を蒙ふる品物もあれど本書の如きは實に『良薬を口に甘からしめたるもの』なれば、苟も女子に就いて多少の利害關係を感じる者は、之を讀みてかかはりをこそ希へ、決して顔を擧むるが如き

ことなかるべきを信ずるなり。(信濃田年秀評)

枯草 野口雨情著

發行所は水戸の高木知新堂といふ書林。代價は十六錢、體裁は雅致ある袖珍の書物、ページは五二頁、『毒も罪も』以下十七篇、悉く青年詩人たる著者の詩想より溢れ出たる小さい新體詩集なり。題して「花も實もなき枯草の一篇、わか親愛なる諸兄に捧ぐ」とあり。

僕には一向此方面の眼がないので、事々しく批評などする事が出来ぬが、これについて聊か他と趣を異にすると思はれる節は、一体この種の文學には星や莖や、ハートなどがつき物であるけれども全篇通じて夫が見當らぬ。従つて咏じた品物には餘り突飛なハイカラが見えぬ、夫に、言葉に面白

い俗調を交せて其調和が割合甘く行つて居る。面白いのを一つ出して紹介して置させよう。

難祭りする九歳の

お竹は又も思いけり

桃の花、桃のはな

難さまと何語るゝ

去歲もことしも

一昨年も

物めしまさめ

やさしさこゝ」

日は永くして難様の

欠伸にくるゝ三ヶ日

夜は短かくて桃の花

ねむた顔なる春の宵」

ある夜難燈は消えて

幼きものよと子鼠の

幾ともからは忍び來ぬ

されとも家人は知らでありき」

難さまの難さまの

鼻かおられて哀れなり

緋桃の花はちりけりと

次の朝下婢あはて告げぬ」

この道に心ある人ならば御覽じて宜しいでせう

(日向志)

明治の家庭 第一卷第號

家庭の爲めの雑誌がいろく出るといふのは、兎に角悪い現象とはいへぬ。これは岸那福雄君の編輯せられる雑誌で、近頃やつと産聲を上げたのであります。題號でも知れる通り一般の家庭雑誌